THE NATIONAL
ART CENTER, TOKYO

NEWS

国立新美術館ニュース

NO. 1
JAN.
2007

マテリアル・ワールドに生きて――インスタレーションの作家たち

開館記念展「20世紀美術探検　ーアーティストたちの三つの冒険物語ー」は三部構成になっていて、このうち第Ⅲ部は、6人の現代作家を集めたグループ展である。第Ⅰ部・第Ⅱ部が、美術館や個人コレクターの方々の所蔵作品、つまりすでに存在している作品から構成されているのに対して、第Ⅲ部は新作が中心である。新作ということは、世界で初めて目にする作品もあるわけで、それはとてもスリリングなことである。現代の美術を見ることの醍醐味は、そういうところにもあるのではないだろうか。

さて、今回の展覧会では、11月末から12月上旬にかけて、次々と作家やアシスタントたちが美術館にやってきて、展示を行った。コーネリア・パーカー、田中功起、マイケル・クレイグ=マーティン、髙柳恵里、アンドレア・ジッテル（のアシスタント）、シムリン・ギル。やってきた順番は、だいたいこのようになる。展示内容の相談・決定から実際の展示まで、何度も作家たちとのやり取りはあるのだが、そのなかにはそれぞれ個性が現れていてとても興味深かった。

今回の展覧会の場合、作家を選んでコンタクトをとり始めたのが、だいたい2年ちょっと前である。いろいろと紆余曲折があって、最終的にこのメンバーによるグループ展となった。第Ⅰ部・第Ⅱ部が、網羅的な展覧会を目指したものであるのに対して、第Ⅲ部の場合はそうではない。「マテリアル・ワールドに生きる」というタイトルとテーマがあったとして、どのような作家たちを選んでくるかは、企画者が違えばまったく違ってしまったかもしれない。

向かって左がコーネリア・パーカーさん

交渉の実際は、なるべく作家に直接会って話をすることから始める。2年前といえば、国立新美術館はまだ存在していなかった。建設中の美術館の人間としては、まず美術館とそのコンセプト、特性を説明しなければならない。そして展覧会のテーマとねらい、出品作品の内容を話す。もちろん、その作家の作品をどう考えているのか、どうして今回の展覧会に参加を要請しているのかを説明する。

今回の展覧会で、第Ⅲ部のテーマとタイトルに選んだ「マテリアル・ワールドに生きる」、Living in the Material World という言葉に、たいがいの作家が共感を抱いてくれたのが、とても心強かった。初めて会った外国の作家でも、作品や展覧会の話をしていると、同じ世界や問題意識を、あるいは感覚や趣味を、共有しているとおたがいに実感することがある。そんなことも、現代の作家と仕事をすることの醍醐味の一つである。

それでは、それぞれの作家たちとのエピソードを紹介してみよう。

この展覧会のための最初の本格的な海外調査は、2005年の2月に行っているのだが、その際、ロンドンに住むコーネリア・パーカーのスタジオを訪ねる計画を立てた。しかしながら、コンタクトを取ってみると、驚いたことにコーネリアは、私たちがロンドンを訪れるちょうどその同じ時期に、日本に来ることになっていたのだ（愛知万博イギリス館の展示のため）。そのため、イギリスでは、ロンドンの彼女の取り扱い画廊を訪問し、見られる限りの彼女の作品を見ることにした。ちょうどノリッジで、テイトが所蔵している彼女の代表作を展示する展覧会が開かれていたし、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館には、彼女のコミッション・ワークがあった。一方コーネリアには、名古屋から東京に来てもらい、建設中の美術館の展示室を見てもらうことにした。インスタレーションの場合、会場の空間を知ってもらうことが重要なのである。その後1年半あまりにわたって、メールでのやり取りを繰り返して、作品を選び、そしてインスタレーションまでこぎつけることになる。昨年11月末に、インスタレーションのためにやって来たコーネリアに初めて会ったとき、「とうとう会えましたね！」とお互いに顔を見合わせたのが印象に残っている。彼女は、1月のオープニングにはこなかったのだが、それは、二酸化炭素の排出を抑えるために必要最小限しか飛行機に乗らないことを信条としているためだということだった。最近日本でも公開されたアル・ゴアの映画『不愉快な真実』をしきりに勧めていたのが思い出される。そう言えば彼女の作品も、リサイクルで作られているのである。

田中功起は今回の中で一番若い作家である。彼の今回の作品は、今までの集大成的なものだと言えるだろう。廊下のように長い展示室に驚いた人もいるのではないだろうか。これは、幅5メートル、長さ約50メートルの空間である。50メートルの展示室のアイデアは、田中功起が建設中の建物に展示室の下見に来たときに、「やろうとおもえば50メートルの部屋でも取れます」と話してしまったことが、もとになっている。そうはいっても、「じゃあ、長さ50メートルの廊下みたいに細長い部屋を使ってもいいでしょうか」とほんとうに言われたときには絶句してしまった。規格はずれのこの部屋のために、展示室全体のレイアウトを考えるのがほんとうにたいへんになってしまったのだが、苦労のかいがあったと思っている。インスタレーションができあがってみて、ほんとうに作品にぴったりの空間になっていることがわかった。作家によって、空間の感覚は違っているもので、言われるままに作品を並べていたら、多すぎることも往々にしてあるものなのだが、彼の空間把握は正確だった。

この展覧会と前後して、田中の作品は森美術館や水戸芸術館、上野の森美術館の展覧会でも紹介される予定になっている。まさに、今いちばん注目されている若手作家と言うことができるだろう。それぞれ見比べてみると、作家がどんなことを考えているのか、いっそうよくわかるかもしれない。

マイケル・クレイグ=マーティンは、今回の中でももっともベテランに属するアーティストである。ロンドンのゴールドスミス・カレッジという美術大学の教授を長らくつとめていて、ダミアン・ハーストをはじめとするＹＢＡの作家たちを育てたことでも知られる。2005年の2月にロンドンのスタジオを訪ねて話をし、半年後に日本に招いて展示室を見てもらった。もともと、壁に直接描いたカラフルなウォール・ドローイングが頭にあって、彼に話をしたのだったが、日本で聞いたプランは、全く違ったものだった。前々から温めていたプランがあって、それはコンピュータを使ったプロジェクションの作品であり、もしとてもクオリティの高いプロジェクタが適当な費用でチャーターできるなら、それをやってみたいというのである。ウォール・ドローイングや壁紙（プリンタによる出力）の仕事は過去にもやっているが、コンピュータによる大規模なプロジェクションはやったことがないので、自分としてはそれがいちばんやりがいがある、と言われて、それはぜひ実現したいという思いを抱いた。それから一年あまり、館の内外のスタッフの努力で、新作が作家の理想的なかたちで実現することができたのは、ほんとうに喜ばしいことだった。

髙柳恵里とは、以前一度、「ひそやかなラディカリズム」という展覧会（東京都現代美術館、1999年）で一緒に仕事をしたことがある。そのとき印象に残っているのは、展示を誰よりも短い時間で完成させて帰っていったということであった。これは、自分の作品について迷いがないということなのだと思うし、細部にいたるまでよく考え抜かれていることの証拠なのだと思う。彼女の作品は、素材にせよ形式にせよ、じつにさまざまで多岐にわたっている。そして、同じタイプの作品を何年も作り続けているというようなことはない。それは、あるタイプの作品で検証したいことをすべて実現してしまうと、同じことを反復するようなことはしない、ということなのではないかと思う。髙柳恵里のように潔いアーティストもまた、じつは珍しいように思われる。さて、今回の展示では、展覧会が始まったあとも、彼女は誰よりも頻繁に美術館を訪れている。それはなぜかといえば、《生花》という作品のためである。松と菊という本物の花材を使った作品は、何日かにいっぺん、必ず作り直さなければならないのである。

アンドレア・ジッテルは、今回の展示のために来日することができなかった。展示の作業には、長年アシスタントを務めている人がやってきた。それは、一つには彼女が世界中でひっぱりだこの忙しい作家であるということであるし、また家族との時間を大切にしているということでもあるように思う。彼女と会ったのは、2005年の秋にロサンジェルスでのことだったのだが、そのときも赤ちゃんの世話の合間を見て時間を取ってくれたのだった。今回の展示も、最終的なプランがまとまるまでにかなり時間がかかっていて、またぎりぎりまで変更を重ねた末に実現したものである。展示は、家具と洋服と平面作品によるインスタレーションと、映像の作品からなっている。ぎりぎりになってから、壁に「モカ・ブラウンのストライプ」を塗ってほしいというメールが来たときにはほんとうに驚いてしまった。さらに驚いたのは、映像の部屋にもストライプを塗ってほしいといわれたことである。展示を10日後に控えて、「どうしてかはわからないけど、茶色の地の上に映写した方がほんとによく見えるのよ！クレージーね」というメールが転送されてきたのだった…。そして、たしかに実際にそれがほんとうによく見えたのだった。どうしてかはわからないけど。

右に座っている女性がシムリン・ギルさん

シムリン・ギルは10年来シドニーに住んでいる。じつのところ彼女は、シンガポール生まれのマレーシア人でシドニーに住んでいる人、である。多くの日本人にはなかなか理解しがたいシチュエーションだと思う。2006年にたまたまシドニーを訪れる機会があり、そのとき彼女の自宅におじゃまして最終的な打ち合わせをすることができた。シムリンの家は、シドニー郊外の住宅地、マリックヴィルにあった。今回の出品作品の被写体となっているのも、この町である。町とか住宅地とか言っても、そういう言葉からイメージしていたものと、そこはどことなく違う場所だった。シドニーの古い建物は、熱帯アジアのいわゆるコロニアル・スタイルに似た様式によって建てられているので、どことなく違和感があるのかもしれない。彼女は、特にスタジオのようなものを持たず、家族と一緒に住んでいる家の、台所のテーブルの上を仕事場にしていた。それはまた、彼女の作品に似つかわしいように思えるのだった。普通に家庭生活を送っている女性が、彼女のように強靭な批判精神と鋭敏な感性を持って、繊細な作品を次々と生み出し続けているのは、ほんとうにすばらしく、そして驚くべきことに思える。

今回の展覧会で、どの作家とも楽しく、気持ちよく仕事をすることができた。彼ら、彼女らと、いくらかの時間を共有することができたのは、とても幸運なことであった。

南雄介（みなみ ゆうすけ　主任研究員）

小さなパリをめざして

監修者アムリン氏も出席した記者発表（2006年9月）

世界有数の国際都市、東京。なかでも六本木は、外国人が多く居住するエリアとして知られています。その六本木に開館した国立新美術館にふさわしい国際色豊かな展覧会が、2月7日から開催されています。「異邦人（エトランジェ）たちのパリ 1900-2005　ポンピドー・センター所蔵作品展」です。

「芸術の都」と称されるパリには、世界中から美術家たちが集まりました。20世紀初頭には、モディリアーニ（イタリア）やキスリング（ポーランド）、パスキン（ブルガリア）、シャガール（ロシア）、そして日本人の藤田嗣治（後にレオナール・フジタと改名）など「エコール・ド・パリ」と呼ばれた外国人美術家たちの一群がモンマルトルやモンパルナスに住みつき、アカデミックな技法にとらわれない自由な表現で、個性あふれる作品を生み出しました。異なる視点から捉えた物体の形態を画面上で総合するキュビスムを提唱し、その後の20世紀美術の展開に多大な影響を与えたピカソ（スペイン）もそのひとりです。

1920年代から30年代にかけては、フランス人の詩人アンドレ・ブルトンを主導者とするシュルレアリスムがパリで開花し、世界的に波及します。ここでもエルンスト（ドイツ）やマンレイ（アメリカ）、ミロ（スペイン）など、外国人美術家たちがその中心となって活躍しました。

シュルレアリスムと並んで20世紀美術の大きな柱になったのは、抽象美術です。パリは早くから抽象美術の中心地でもありました。第二次世界大戦後、シュルレアリスムは美術運動としての勢いを失いますが、抽象美術はパリでさらなる展開を見せました。1950年代、パリでは眼の錯覚を利用し画面が動いているかのように見せるオプティカル・アートや、モーターなどを使って作品に動きを取り入れたキネティック・アートが隆盛する一方、そのような理知的に構成された「冷たい抽象」に対し、サム・フランシス（アメリカ）やジョアン・ミッチェル（アメリカ）、ザオ・ウーキー（中国）、日本人の今井俊満、堂本尚郎などによる、激しい身振りを強調したり、画面に絵具だけではなく砂などを混入して物質感を際立たせたいわゆる「熱い抽象」が登場し、注目を集めました。

1960年代に入ると、新しい美術の中心地はニューヨークへと移ります。それでもパリは、自由を求める世界中の美術家たちにとって、美術の聖地であり続けました。作品の内容よりも表現の新しさを追い求めたニューヨークの美術界とは対照的に、パリの美術界では、外国人美術家たちにより社会的、政治的、哲学的な主題を持ったユニークな具象絵画が生み出されます。人や物、情報が地球の隅々にまで行き交う今日、世界はグローバル化が進み、「中心地」の

日仏担当者立会いのもと作品が入った木箱を開ける（2007年2月）

作品を点検中（2007年2月）

ポンピドー・センター外観（2006年10月）

概念は過去のものになりましたが、外国人美術家たちにとってパリは、今もなお歴史と文化の蓄積された都市空間に身を置き、アイデンティティーを再発見する装置として輝きを放っています。

このように、本展は1900年から2005年までの約100年間にわたるパリでの外国人美術家たちの活動を振り返るものですが、タイトルが「パリの異邦人たち」ではなく「異邦人たちのパリ」であることにご注目ください。つまりここでの主役は美術家ではなく、パリという都市そのものなのです。パリとは外国人美術家にとっていかなる都市であったのか。パリが外国人美術家たちをかくも惹きつける理由とは何なのか、パリは外国人美術家を受け入れながらどのような文化を生み出していったのか。それが本展のテーマです。本展が語りかけてくるこうした問いは、異なる文化や価値観との共生という今日の国際社会の課題につながる問いかけであり、ひいては多種多様な人、作品、情報が集うアートセンターとして機能していく国立新美術館にとっても重要なテーマであるともいえるでしょう。その意味で本展の開催は、国立新美術館がこれから小さなパリをめざすことの宣言でもあるのです。

平井章一（ひらい しょういち　主任研究員）

開会式で挨拶する林田館長（2007年2月）

会場風景

会場風景

アートライブラリーのご紹介

国立新美術館は作品を所蔵しませんが、代わりに近代以降の日本の美術に関する資料を網羅的に収集し、保存、公開します。その資料の核になるのは、戦後日本で開催された展覧会のカタログであり、「アートカタログ・ライブラリー」の旧蔵書です。

今から十年ほど前の1995年、アメリカのセントルイスの美術館で、かつて例のない規模と周到な調査のもと、近代日本画展「NIHONGA」が開かれました。この展覧会を担当したキューレータは、調査の過程で、アメリカにおいて近現代の日本美術の研究情報、特に日本の展覧会カタログに触れる場所も方法もないことに落胆し、展覧会開催後、多方面にその必要性を強く働きかけました。この呼びかけに応じて、1996年、(財)国際文化交流推進協会が、日本の美術館・博物館から美術展のカタログを二部受贈し、一部をアメリカへ、片方を東京に設けた「アートカタログ・ライブラリー」で保存・公開するプロジェクトを立ち上げました。赤坂にあったこの日本初のカタログ専門図書館「アートカタログ・ライブラリー」は、残念ながら諸般の事情により2004年に閉室しましたが、幸いにもその約12000冊の蔵書のすべてが国立新美術館に引き継がれることになりました。同時に、(財)国際文化交流推進協会が行っていたアメリカやドイツ、オーストラリアの計4機関に日本の展覧会カタログを寄贈するJAC（Japan Art Catalog）プロジェクトもまた、当館が引き継ぎました。

これら「アートカタログ・ライブラリー」の旧蔵書を含む国立新美術館所蔵の資料の情報は、データ化され、広く公開されます。アートライブラリー内で手にとってご覧いただける、いわゆる開架資料は、当館の所蔵資料の一部です。書庫の資料については、アートライブラリー内に置かれた端末で検索できますので、所定の手続きを経てカウンターでご請求いただければ、どなたでもご覧いただけます。また、当館は、東京国立近代美術館と図書館システムを共用しますので、2004年以来、東京国立近代美術館、国立西洋美術館、東京都現代美術館、横浜美術館、東京都写真美術館のそれぞれの図書室との間で実現している「美術図書館横断検索ALC（Art Libraries' Consortium, http://alc.opac.jp）」にも参加します。資料の有無をインターネットで調べてからご来館いただくことも可能です。

国立新美術館が所蔵する展覧会カタログは、前述した(財)国際文化交流推進協会のみならず、その多くが全国の美術館、博物館、画廊、その他の機関および個人の方々からのご寄贈によるものです。ここにあらためてお礼申し上げます。展覧会カタログを中心に、特徴ある、親しみやすいアートライブラリーを目指して参りますので、皆さまの今後のご支援をお願いいたします。

● 利用案内

アートライブラリーは3階にあります。皆さまのご利用をお待ちしています。
どなたでも無料でご利用いただけます（複写は有料です）。ご利用の詳細に際しては、アートライブラリー内に備え付けの「利用の手引き」、または当館のホームページをご覧ください。
なお、館外貸し出しはいたしておりませんのでご了承ください。

開室時間　11：00－18：00
休 室 日　毎週火曜日
（祝日の場合は開室し翌日休室）
年末年始および特別整理期間

レストラン・カフェのご紹介

国立新美術館には、4つの食の空間があります。

BRASSERIE
PAUL BOCUSE
Le Musée

ブラッスリー ポール・ボキューズ・ミュゼ　3F

美食の都リヨンの「レストラン ボキューズ」で40年以上三ツ星を維持する世界最高の料理人ポール・ボキューズ氏。同じくリヨンに展開する5軒のブラッスリーは、長らく地元の人々に愛されています。このブラッスリーが世界で初めて「国立新美術館」にオープン。本場の味を受け継いだ正統なフランス料理を気軽にお楽しみいただけます。

子羊のナヴァラン

リヨン風白身魚の軽いクネル

Salon de Thé
ROND

サロン・ド・テ ロンド　2F

2階には、逆円錐上部の円形（ROND）に広がるサロン・ド・テ。世界のファッション誌の代名詞『VOGUE』とのコラボレーションによる、クォリティーと感度の高さを感じる空間です。

Café
COQUILLE

カフェ コキーユ　1F

1階エントランス付近には、貝（COQUILLE）のようにウェーブのかかったガラスカーテンウォールに隣接し、天井高約21mのアトリウムとテラスに広がるカフェ。

Cafétéria
CARRÉ

カフェテリア カレ　B1

地下1階には、四角く（CARRÉ）広がるキャンティーンスタイルのカフェテリア。あらゆる時間帯に気軽に寛いでいただけます。

ミュージアムショップのご紹介

SFT
THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO
MUSEUM SHOP + GALLERY
SOUVENIR FROM TOKYO : BY CIBONE

スーベニア フロム トーキョー　B1

世界中から幅広い年齢層、国籍の人々やモノが集まる東京。古いものと新しいもの、スターデザイナーと無名アーティスト、エレガントなものとジャンクなもの――あらゆるものが、ひとつの街の中で渾然一体となっている状況。そして圧倒的な編集能力でそれらを新しい驚きに形作る、その手法こそ、現代の東京独自のスタイルといえるでしょう。国立新美術館のミュージアムショップ「スーベニア フロム トーキョー」は、カオティックな東京のエネルギーをそのまま凝縮して皆様にお届けします。

プレイベント レポート——①

日豪アート交流フォーラム

2006年9月29日－30日

主催：国立新美術館、オーストラリア大使館
　　アジアリンク、豪日交流基金

2006年9月29日、30日の2日間、国立新美術館プレ・オープニング企画として「日豪アート交流フォーラム」が開催されました。このフォーラムは2006年日豪交流年にあわせ、現代美術を通じた日本とオーストラリアの文化交流を目的に企画されたものです。両国の現代美術の専門家34名が参加した日豪美術関係者会議につづき、「オーストラリアと日本—美術の現在と未来」と題する公開シンポジウムが開かれ、両国をつなぐ展覧会や最新の美術状況の紹介、アーティストの滞在制作に関する報告等が行われました。シンポジウムには約150名の一般の方々も参加し、日豪アート交流の最新状況に関する活発な議論が行われました。

日豪美術関係者会議（於国立新美術館研修室）

公開シンポジウム（於国立新美術館講堂）

左から、飯田志保子氏（東京オペラシティアートギャラリー）、アナ・ワルドマン氏（オーストラリア・カウンシル）、ホセイン・ヴァラマネシュ氏（アーティスト）、土屋公雄氏（アーティスト）、北川フラム氏（「大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ」総合ディレクター）、マーゴ・ニール氏（オーストラリア国立博物館）

プレイベント レポート——②

国立新美術館建築ツアー

2006年10月13、15、19、21日

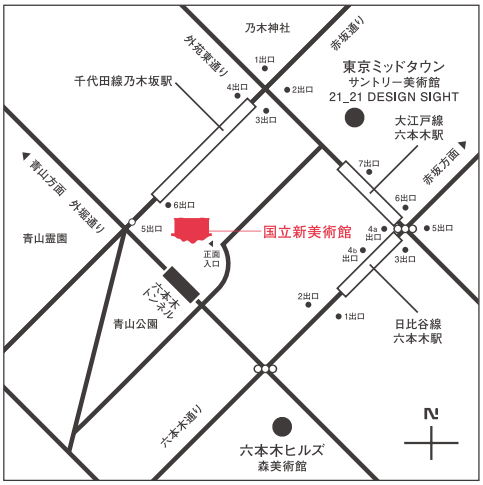
建物見学会

2006年10月26、27日

2006年10月13、15、19、21日の4日間、プレ・オープニング企画として国立新美術館建築ツアーが開催されました。5000名を超える応募者の中から抽選で選ばれた637名が参加し、職員やインターンによる解説を聞きながら、黒川紀章氏設計の美術館内を見学して回りました。約一時間のツアーは終始和やかな雰囲気で、搬入口などバックヤードの見学や、展示室の隠された機能などに関する解説が好評でした。

また追加企画として、10月26、27日、建築ツアーにご参加いただけなかった方々を対象とした建物見学会が開催されました。2日間で1290名が展示室などの施設を見学しました。

編集・発行：独立行政法人国立美術館　国立新美術館
〒106-8558　東京都港区六本木 7-22-2
tel. 03-5777-8600（ハローダイヤル）
fax. 03-3405-2531（代表）
http://www.nact.jp
表紙デザイン：佐藤可士和
制作：印象社
2007年1月31日発行

アクセス

東京メトロ千代田線乃木坂駅　6出口（美術館直結）
東京メトロ日比谷線六本木駅　4a出口から徒歩5分
都営地下鉄大江戸線六本木駅　7出口から徒歩4分